

『オセロー』における苺模様の刺繍のハンカチ（2）

下 田 梨 紗

『オセロー』における苺模様の刺繍のハンカチ（2）

A Handkerchief in *Othello* : 'Spotted with Strawberries' (2)

下田 梨紗

はじめに

本稿は「『オセロー』における苺模様の刺繍のハンカチ（1）」の続稿である。前論文では、『オセロー』に登場する重要な小道具である苺模様の刺繍のハンカチに焦点を当て、シェイクスピアの生きた当時のハンカチと現代のものとは如何に異なるのか、一枚のハンカチがどのように作品に影響を与えてきているのかを論じた。

このハンカチは、オセローがデズデモーナに初めて贈ったものであり、それをデズデモーナがなくなしてしまったことが彼女の不義を決定づけるという点で重要な役目を担っている。前論文では、当時のハンカチは現代の観客や読者が思い浮かべるようなハンカチとは異なるということを念頭に置かなければならないとし、現代と当時のハンカチが如何に異なるのかを中心に考察した。

また、イアーゴによって唯一語られる、このハンカチの外見の描写である'spotted with strawberries'の'spotted'という単語に着目し、これはシェイクスピア作品において'stain'「染み、汚点」と見なされることが多く、更には女性にまつわる染みや汚点として用いられているということが分かった。『オセロー』のハンカチもまた、デズデモーナの汚点を示すことになってしまうのである。

それらを踏まえ、本稿ではまず一つ目に他シェイクスピア作品において苺がどのように表されているのかを考察し、植物学的観点、

そしてシンボリズムからの観点から『オセロー』のハンカチの苺模様がどのような意味を担っているのかを検証する。二つ目に、『オセロー』でハンカチを示す語に'handkerchief'と'napkin'と二つの語が用いられている理由を探るため、他シェイクスピア作品においてどのような使われ方をされているのかを見ていく。

1. 植物学的観点、シンボリズムからの苺と『リチャード三世』『ヘンリー五世』から見る苺

現在主に食べられている苺とシェイクスピア時代の苺は異なるということに前論文で触れたが、まずは苺の歴史を振り返り、シェイクスピア劇の『オセロー』以外の作品の苺の言及がどのようにされているかを歴史的、植物的、象徴的に考察していきたい。

ハンカチと同じく、苺もまた様々な面で現在と異なる。苺の歴史としては、以下のような記録が残っている。苺の種子はヨーロッパでも最古といわれるスイス先住民住居跡やデンマークの遺跡からも発見されている上に、鉄器時代には既にイングランドでも食べられていた（今川、111頁）。995年にベネディクト派の僧アエルフリックが編集した『アングロサクソン辞典』には苺という語が既に載っている。また、『オックスフォード英語辞典（第二版）』には1000年 streaberize として初出し、現在の strawberry は15世紀後半から16世紀初めに使用されるようになったようで

ある（山崎、18-19頁）。いつ頃から苺が栽培されたのかというと、1368年にフランス王シャルル五世が1200株もの苺の苗を庭園に植えたという記録が残っており、恐らくこれが現存する最古の記録である。15世紀になると当時のロンドン街頭では‘Strabery ripe!’の叫び声を上げて売り歩いていたようであり、この時の苺の品種は wild strawberry であり、今日の栽培種原種であった Hautbois や Chilian は当時はまだ知られておらず、北米種 Virginian が伝わったのも1629年のことである（加藤、603頁）。そして様々な品種改良が行われ、19世紀に入ってから現在食べられているような苺が生まれた。したがってシェイクスピア時代には現在の苺とは幾分異なるものの、彼の生まれるはるか昔から苺という植物があったことが分かる。エリザベス朝演劇で苺が用いられるのはそう珍しいことでもないようであるが、シェイクスピアは『オセロー』を含めて三作品しか苺を登場させていない。

具体的にシェイクスピア時代の苺はどのようなものであったのかを知るために、『オセロー』以外の戯曲でどのように苺を用いたかを検証してみる。『オセロー』の他にも苺が登場する戯曲は『リチャード三世』と『ヘンリー五世』が挙げられ、そのうち『リチャード三世』では、苺にまつわる次のような会話が繰り返される。

Richard

— My Lord of Ely, when I was last
in Holborn
I saw good strawberries in your garden there:
I do beseech you, send for some of them.

Ely

Marry and will, my lord, with all my heart.

(3. 4. 31-34)

リチャード¹

この前ホルボーンのお宅にうかがったとき、庭先にみごとなイチゴがなっているのを見かけたが、できたら少し、送り届けていただけませぬかな？

イーリー

もちろん、喜んでお送りしましょう、公爵。

このように、リチャード（後のリチャード三世）がイーリーに苺を送るよう頼む場面がある。この直前の場面は戴冠式について話しており、一見取り留めのない何も脈絡のない話にも感じられるが、実はそうではない。この苺の逸話は、イーリー司教ジョン・モートンにかつて仕えていたサー・トマス・モアが詳細に語る史実であり、シェイクスピアはこの『リチャード三世伝』を種本にして書いている。角川文庫の『リチャード三世』を訳した河合はこれをリチャードの仇敵であった司教の気をそらすために苺を命じたのだらうと考えている。また、当時は苺の葉の下には邪悪な悪の象徴である蛇が潜むと考えられており、苺の根元に絡む蛇の図像までもが存在したとちくま文庫の『リチャード三世』を訳した松岡は指摘している。それに関連してアーデン版編集者は、苺は目に見えない裏切りに繋がる象徴的なものと解釈しており、リチャードはイーリーの元に邪悪さと裏切りを見ていたのかもしれないと考えることも出来る。実際に戯曲後半のボズワースの戦い直前にイーリーがリッチモンドの元へ走ったことがリチャードに知らされる。また、史実ではこの一連の苺を頼む会話が合った日にイーリーが逮捕されることになっているのである。シェイクスピアは作品内に何気なく苺という果実を用いることで、背後に裏切りの予感を感じ

させているのではないだろうか。

現在、目上の人物に自宅の庭で育てている苺を贈るということは滅多にないことであるために、リチャードがわざわざイーリーに苺を頼むという台詞から、当時は苺が高級であり、物珍しいのだろうかと推測することが出来る。実際にイーリーは当時ロンドン市外西部のホンボーンに Ely House と呼ばれる屋敷と広大な敷地を所有しており、苺のほかにもバラや葡萄やサフランなどの当時珍しい、値の張る植物を植えていたことで有名であった(加藤、603頁)。それらの植物自体が高価で、更には今ではイギリス国民的趣味とされるガーデニングという行為自体が当時誰でも出来るものではなかったようである。16世紀後半になると森から野生の苺の株を庭園に移植するガーデニングが王侯貴族たちの中で流行し出したが、これは単に楽しむだけではなく、この背景には一年にひと月ほどしか収穫することの出来ない苺を栽培することは農家にとって割に合わず、自ら栽培するよりも森で摘んできたほうが良いために王侯貴族の間でしかむしろ楽しむことの出来ない道楽であったという事情があった。これらのことにより、現在よりもはるかに上回る苺の希少性と高価さが明らかになる。

『ヘンリー五世』でも以下のような苺に関する記述が見られる。主人公ヘンリー五世は『ヘンリー四世』では放蕩息子であり、父王ヘンリー四世を悩ませていたが、いざ戴冠してみると名君となり皆を驚かせた。それに対しイーリーが発する文である。

Ely

The strawberry grows underneath
the nettle,
And wholesome berries thrive and
ripen best,
Neighbour'd by fruit of baser quality:

And so the prince obscured his
contemplation

Under the veil of wildness.

(1.1.60-64)

イーリー

イチゴはイラクサの下に隠れてなお成長し、上等な実は下等な果実と隣りあわせになった時、もっともよく成熟するといえます。

王もまた放蕩生活のベールの下に、深い考えを隠していられたのでしょう。

当時の通念として、植物は周囲のほかの植物から善かれ悪しかれ、影響を受けるものとされていた。特に実を食す植物の場合は実の風味をよくするために、果樹の近くにはそれに良い花を植え、臭気を発する木は好ましくないとされていた。しかし苺だけは例外で、毅然として己を持し、周囲からなんら害毒は受けないとされていたためにこのような比喩に用いられることがあった(加藤、605頁)。また『シンボル事典』によると苺 (strawberry) というのは地を這う枝が藁 (straw) に似ているためにこの名がつけられたと言われている(水之江、21頁)。未熟の間は乾いているが、完熟するとみずみずしい果実になることも踏まえ、イーリーはヘンリー五世に準えたのだろう。苺は苺でも、『ヘンリー五世』ではヘンリー五世が「イラクサの下に隠れてなお成長する」苺に喩えられているが、苺は一般に「喜ばしいものの結実」という肯定的な概念を示すためにこれは「放蕩生活に隠された善」を示している(水之江、21頁)。シェイクスピアが『ヘンリー五世』の中で苺を引用し、数ある苺の象徴の中からこの意味で用いている以上、少なくとも「放蕩生活に隠された善」という意味を理解した上でイーリーに発言させていることは疑いない。『リチャード三世』にしる『ヘンリー五世』にし

ろ、双方とも現在最も支持されていると言われている E・K・チェーンバーズの創作推定によると『オセロー』より前の作品であるため、種本ティンティオの『百物語』に登場するハンカチのムーア風の装飾をシェイクスピアは『オセロー』で苺という果実に変えたことには何らかの意図があると見なせるだろう。苺の象徴としてシェイクスピアが「放蕩生活に隠された善」以外に何を知っていたのかは定かではないが、少なくとも何かしらの重大な意味が込められていると推測することは出来る。

これからは苺には他にどのような意味が込められているのかを見ていく。『西洋シンボル事典』によると、苺はすみれと同じく謙遜

と謙虚の象徴であり、三位一体を示す一方、現世の欲望への誘惑の象徴となることもあるという（ムーア、23-24頁）。それが絵画となり生かされているのが、シェイクスピアより少し前のルネサンス期を生きたネーデルラント（フランドル）の画家 ヒエロニムス・ボス（1450頃～1516）の代表作である三連祭壇画『快樂の園』（図1参照）である。様々な解釈があるものの、一般的には左パネルはイエス・キリストとアダムとイヴのいる明るいエデンの園を表しており、一方右パネルは奇怪であり、暗く、得体の知れない胴体が卵になっている男などが存在し、これらは地獄を表していると思なされるようである。現在までもっとも議論されてきた中央の一番大き



図1³ 『快樂の園』全体



図2 『快樂の園』中央パネル

なパネルは、無数の裸の男女が様々な快樂に耽っている様子が描かれている。（図2参照）この中央パネル下部に実際よりも巨大化された苺が描かれており、けだものにされる無数の人間たちの欲望の対象として苺が描かれている。（図3参照）



図3 『快樂の園』 中央パネル下部

この絵画の中には苺の他にも葡萄や林檎といった果実も描かれているが、かつてこの絵が「イチゴ絵」という名で呼ばれていたことから苺の重要性が伺い知れる。スペイン僧グエンサによると苺は「はかなさと光輝とつかぬまの興味」を示すものであり、肉体の喜びの実態なき性質を象徴しているという。またドイツでは、苺は人がどれだけ食べても満たされない、空腹のままである果実であると伝えられている（神原、96頁）。これらのことは貪欲な人間の限りない性欲へとも繋がるだろう。性欲は生殖本能に繋がる重要な人間の欲求のひとつであるが、中央パネルの苺に嚙り付く裸の人間の表情と左パネルの地獄を思わせる絵から、ボスはその欲求を非難しているように思われる²。苺には対照的なシンボリズムが多く様々な捉え方が出来るが、この『快樂の園』では快樂の象徴の果実として

描かれ、その重要性が浮き彫りとなっている。

その他にも苺は様々な象徴と見なされる。『イメージ・シンボル事典』では聖母マリアのエンブレム、狂った乙女の死んだ恋人が隠されている場所や前述したよう『ヘンリー五世』で用いられた悪の下に隠された善、という隠された意味もある上に、民間伝承では苺は赤い実のゆえに妖精や魔女、神々の食物であるために食べてはいけないものとされる時もあるという（フリース、610-611頁）。

苺はシェイクスピアの生きた時代よりもはるか昔から神話の中で存在しており、『シンボル事典』では北欧神話の愛と豊穡の女神フリッグ Frigg は死んだ子供を苺の茂みに隠しておいた後に天国へ連れて行ったことから愛の女神の象徴ともされ、更に苺の三つに分かれた葉がキリスト教の三位一体を表すとされている（水之江、21頁）。更には、苺は始めは冷たく乾いているが、時が経つにつれて熟れると冷たく湿ったものになることから、ヴィーナスとも結び付けられている（神原、96頁）。

また、シェイクスピアに多大なる影響を与えたとされ、彼の戯曲にも何度も登場しているオウィディウスの『変身物語』にもまた苺がポリュペモスとガラティアの物語で登場している。この物語は以下のようなものである。海の神ネーレウスの娘ネーレーイデスの一人であるガラティアは、川のニンフの息子アーキスと恋に落ちるが、それと同じように単眼巨人であるキュクロプスのポリュペモスがガラティアを愛するようになる。ガラティアはポリュペモスの熱心な求愛を疎ましく思い逃げるが、ポリュペモスが投げた巨大な石によってアーキスが殺されてしまうという筋の内容である。そして死んだアーキスの血はエトナ山のそばを流れる川になるのであるが、この物語の中で苺は『黄金時』を生きる人間のための苺と呼ばれており、ポリュペモスがガラティアの愛を得るための高価な果実とし

でも語られている。ポリュペムスの恋は最終的に実らずに苺と同じ赤い血で染まる悲劇的な結果となってしまったが、愛する人の愛を得るために苺が用いられることでオセローの苺模様のハンカチの共通点が見出せる。

苺は果物の中でもルネサンスから受け継いだ、伝統あるエンブレムでもあった(Boose, 56)。シェイクスピアはエリザベス一世(在位1558-1603)とジェームズ一世(在位1603-1625)の双方の時代を生き、『オセロー』の初演が1603年又は1604年と仮定するならば、エリザベス一世、ジェームズ一世の双方に敬意を持って戯曲を書いたとするのが妥当だろう。また、創作年代はこれまで伝統的に1603-04年とされてきたが、近年ではアーデン版編集者のように1601年初頭から1602年に執筆されたのでは、という見方も強まってきている。数年の差ではあるが、高杉が指摘するよう女性の君主であった時代に『オセロー』が書かれたかによって、そのニュアンスは変わってくるだろう(高杉, 19頁)。当時にはエリザベス一世の廷臣らの肖像画に、「腰のベルトにさげたボシエットの口を開け、白いハンカチを見せびらかしている」ものが多かった上に1560年代に集中していたことを、石井はこう説明している。エリザベス一世が重い病に倒れ、瀕死の状態から回復した事件に関連があるとも考えられる。この肖像画に描かれた白いハンカチは、「エリザベス一世のエンブレム」であり、「処女王を賛美」し、「女王への忠誠を誓い」、更には「聖母マリアのシンボル」でもあるという捉え方もある(石井, 12-15頁)。執筆当初がどちらの王であったかは分からないにしろ、ハンカチがエリザベス一世の処女性を讃えるものであったという解釈にも納得がいく。

全体を通して見ると、苺という果実には愛の女神、聖母マリアのエンブレム、三位一体、

喜ばしいものの結実といったような肯定的な意味も多くあるが、それと対照的に現世の欲望への誘惑の象徴という意味にもなることが分かった。シェイクスピアは『リチャード三世』でも『ヘンリー五世』でも、その否定的な意味で苺を用いたようには思えない。では、その二つの戯曲を書き終えた後の『オセロー』ではどうか。何よりも愛するデズデモナへの初めての愛の贈り物としての苺模様の刺繍のハンカチ。始めは愛の結晶としての苺の模様だったが、オセローにとってはデズデモナの不貞という卑劣な欲望の証となった苺模様の刺繍のハンカチと変貌してしまったとは言えないだろうか。

2. 血と汗の含まれたハンカチ —handkerchief と napkin—

2-1 『オセロー』に登場する napkin

これまで述べてきたよう、『オセロー』ではたった1枚のハンカチが作品全体に大きな影響を与えているが、このハンカチに対して‘handkerchief’と‘napkin’という2種類の単語が用いられていることは、数多くある『オセロー』のハンカチにまつわる先行研究でもこれまで殆ど指摘されてこなかった。この章では、ハンカチを示す‘handkerchief’と‘napkin’という二つの言葉に着眼し、『オセロー』以外のシェイクスピア作品においてどのような用いられ方をされているのかを述べていく。

まず最初に、それぞれの単語の意味を見ていく。『研究社新英和大辞典』によるとそれぞれの単語は以下のような意味があるという。handkerchief はハンカチーフ、ネッカチーフという意味である一方、napkin は(食卓用の)ナプキン、小さなタオル、(育児用)おしめ、おむつ、(英方言)ハンカチーフ、(スコットランド)ネッカチーフという意味

がある。シェイクスピア時代の英語は初期近代英語 (Early Modern English) と呼ばれるものである。現在、これらの英語は一般的には使われなくなってしまったものも多いが、一部地域の方言として現在も残っているものがある。恐らく、napkin が英国一部の地域でハンカチという意味で現在でも用いられているというのは、そういった経緯があるのだろう。Ridley によると一般的に napkin は 'napery' (= tablelinen) として使われるが、シェイクスピア作品の中では「常に」故意にハンカチという意味で用いられているという。これには意味があるのだろうか。

二番目に handkerchief と napkin がどの程度用いられているのかを考察する。『オセロー』作品中において handkerchief と napkin という単語の登場回数を、ト書きを除いて比較してみると、handkerchief 26回 napkin 3回と圧倒的に前者が多いのだが、後者も多少存在する。ト書きの記述は、作品の台詞部分と同様に底本によって若干異なるが、少なくともペンギン版は全てのト書きが napkin ではなく handkerchief が用いられているため、作品全体を通すと突出して handkerchief が用いられている。しかしながら、handkerchief の登場回数が napkin よりも圧倒的に多いのは事実だが、注意を要するのは、エミリアとイアーゴのやり取りの中で「あのハンカチだって？」と同じ台詞を復唱する場面や、オセローが 'The handkerchief!' と 3 回繰り返す場面でも napkin ではなく handkerchief が用いられているために、繰り返す際に必然的に handkerchief が用いられる回数が増大しているということである。何れにしても、handkerchief と比較すると napkin の登場回数にはるかに少ないということが判明した。では、napkin が用いられている三箇所を検証していく。

OTHELLO

I have a pain upon my forehead here.

DESDEMONA

Faith, that's with watching: 'twill away again.

Let me but bind it hard, within this hour

It will be well.

OTHELLO

Your *napkin* is too little.

(3. 3. 280-284)

オセロー

この額が痛むのだ、やけるようにな。

デズデモーナ

ゆうべおやすみにならなかったせいでしょう。大丈夫、

きつくしばってあげましょう、一時間もしないうちによくになりますわ。

オセロー

お前のハンカチでは小さすぎる。

初めてデズデモーナの貞操を疑い始めたオセローは、額が痛むと妻に告げる。この時代には寝取られ亭主の額に角が生えるという迷信が信じられていた。オセローの台詞はそれを踏まえ、頭 (head) ではなく額 (forehead) が痛むとなっている。イアーゴに嫉妬という毒を注ぎ込まれ、悩み苦しむオセローとは対照的に、デズデモーナは自分の貞淑さが疑われているなど露も知らず、彼女はただ、優しく愛する夫の頭痛を何とか和らげてあげようとする。これは、夫からの最初の贈り物であるハンカチで頭を縛ろうとする場面である。『ジョン王』にもまた、ヒューバートが頭痛に襲われた際にアーサーが最も大切にしていたハンカチで頭を縛るという場面があるため、

頭痛の際に頭（額）を縛るということはよくあったことだと思われる。これが『オセロー』において初めてハンカチが登場し言及される場面であり、handkerchiefよりも先にnapkinが用いられていることが分かる。オセローはハンカチをとりわけ、デズデモーナがハンカチを落としてしまうことがこのオセローの台詞の直後にト書きで判明する。この後に、エミリアが床に落ちたハンカチを拾う際の独白にもhandkerchiefではなくnapkinが用いられている。

EMILIA

I am glad I have found this *napkin*,
This was her first remembrance from
the Moor. (3, 3. 287-8)

エミリア

まあ、よかった、これが手に入って。
このハンカチは奥様がムーア様からいた
だいた最初の記念の品。

このエミリアの独白に含まれるnapkinが作品中二番目にハンカチを表す単語となっており、この場面では未だhandkerchiefが用いられていない。この後、エミリアとイアゴの対話の中にhandkerchiefが三度登場し、イアゴがエミリアからハンカチをひったくった後の以下のイアゴの独白の中でもnapkinが用いられている。

IAGO

I will in Cassio's lodging lose *this napkin*
And let him find it...
(3. 3. 323-324)

イアゴ

このハンカチをキャシオの宿舎に落としておけば、

あいつが見つかるだろう…

このnapkinが『オセロー』最後の登場となり、これ以後はnapkinという言葉は一度も使われておらず、残りは全てhandkerchiefとなっている。

以上、『オセロー』の中でnapkinが登場する三箇所を取り上げたが、これだけではnapkinとhandkerchiefの使われ方の違いはあまり見えてこない。次節では『オセロー』以外のシェイクスピア作品に登場するnapkinがどのような使われ方をしているのかを探る。

5-2 他シェイクスピア作品に登場するnapkin

handkerchiefの代わりにnapkinを用いているシェイクスピア作品は他にも多数あり、『マクベス』、『お気に召すまま』、『ウィンザーの陽気な女房たち』などが挙げられる。『オセロー』においてhandkerchiefとnapkinの使われ方の違いを探るために、他シェイクスピア作品に登場するnapkinを見ていく。

FALSTAFF

There's not *a shirt* and a half in all my of company, and the half *shirt* is two *napkins* tacked together and thrown over the shoulders like a herald's coat without sleeves; and the shirt to say the truth stolen from my host Saint Albans, or the red-nose innkeeper of Daventry. But that's all one, the'll find linen enough on every hedge. (4. 2. 42-48)

フォールスタッフ

部隊全体を見わたしても、シャツと名のつくものは一着半しかない、半っているのはハンカチ二枚をつなぎあわせて軍使の着る袖なし上着のように肩から引っか

けたやつ、一着というのは、実を言やあ、セント・オールバンズの居酒屋の亭主だったか、ダヴェントリーの飲み屋のおやじだったかから盗んだしろものだ。ま、どうだっていいやな、どうせ行く先々の垣根に、上等のシャツがいくらでも干してあるだろう。

これは『ヘンリー四世 第一部』に登場する、ハル王子こと後のヘンリー五世の放蕩仲間であった老騎士フォールスタッフが、戦場であるシュールズベリーへ向かっている際に発する台詞である。自分の部隊を「オンボロども」や「死刑台から引きおろした死骸だけで兵隊を集めた」と言い放ち、嘆いている場面であるが、彼は騎士道精神を持ち合わせていない部下たちを自分のことは差し置いておき、嘆くほか、彼らの衣服のみすぼらしさに対しても苦言を呈している。‘the half shirt is two napkin’の部分に着目すると、フォールスタッフがシャツをハンカチに関連付けていることが分かるが、shirtとsheetの発音が酷似していることからsheetとnapkinの関連性が伺える。

2-2-1 証拠となった血に染まった napkin

napkin が用いられている『オセロー』以外のシェイクスピア作品を検証してみると、血あるいは汗がセットとなって用いられていることが多い。まずは、次節で napkin と血が共に用いられているものから見ていく。

まずは『ヘンリー六世 第三部』に登場する napkin を取り上げる。このシェイクスピア初期の歴史劇は血で血を洗う薔薇戦争の混乱が描かれており、三部作の最後であるこの作品は1455年のセント・オールバンズの戦いの直後から1471年にヨーク側がテュークスベリーの戦いに勝利を収め、エドワード四世が王位につくまでの約16年間が描かれている。

正当な王位継承権を主張して挙兵したヨーク公リチャード・プランタジネット（以下ヨーク）はウェイクフィールドの戦いで敗れ、捕らえられる。ヘンリー六世の後マーガレットは、彼女から見ると反逆罪を犯した男であるヨークに対し容赦せず、非情な行いをする。

QUEEN MARGALET

Look, York: I stain'd this *napkin* with
the blood
That valiant Clifford with his rapier's
point
Made issue from the bosom of the
boy;
And if thine eyes can water for his
death,
I give thee this to dry thy cheekd
withal.
(1. 4. 79-84)

マーガレット王妃

ごらん、ヨーク、このハンカチを染めた血は、
あの勇敢なクリフォードの剣先にえぐられて、
胸元からほとばしり出たラットランドの血。
死んだ子のためにおまえの目でも涙をこぼすものなら、
このハンカチをくれてやるからその頬をぬぐうがいい。

この以前の場面で、ヨークの息子である幼いラットランドが王妃マーガレット側のクリフォードに殺さる様子が描かれている。王妃マーガレットはラットランドの血で染まったハンカチを彼に渡し、それで涙を拭えと迫り、更にはヨークの頭上に紙の王冠を載せ、侮辱するという残忍な王妃が描かれている。それに対してのヨークの台詞が以下のものである。

YORK

See, ruthless queen, a hapless father's
tears.
This cloth thou dipp'd'st in blood of
me sweet boy,
And I wish tears do wash the blood
away,
Keep thou the *napkin*, and go boast of
this;
And if thou tell the heavy story right,
Upon my soul, the hearers will shed
tears;
Yea, even my foes will fast-falling
tears,
And say 'Alas! It was a piteous deed.'
(1.4.156-163)

ヨーク

見るがいい、無慈悲な妃、ふしあわせな
父親の涙を。
おまえはこの布切れをおれのいとし子の
血にひたした、
おれはその血をこうして涙で洗い流すの
だ。
このハンカチをとっておき、自慢の種に
するがいい、
おまえがこの悲しい物語をあるがままに
伝えたら、
きっと、聞くものはみんな涙を流すこと
だろう、
そう、おれの敵でさえ涙の雨をしたたら
せながら、
「ああ、かわいそうなことをしたものだ」
というだろう。

確かにヨークの言うように、幼きラットラ
ンドの罪なき血に染まったハンカチ (“A nap-
kin steeped in the harmless blood / Of
sweet young Rutland”, 2.1.61-62) で父親
に涙を拭かせるというのは残虐非道そのもの

の行為である。更に、この後ヨークはクリ
フォードと王妃マーガレットにより刺殺され
た上に、胴と首を切り離され、無残にも首が
さらされることになる。だが、彼女がヨーク
に見せる残忍さは、夫であるヘンリー六世の
王権を奪われた上に、正当な王位継承者であっ
たヘンリー六世と彼女との間の息子である皇
太子の生まれもった権利をも奪われるという
状況では幾分納得できる箇所があるだろう。
しかしながら、福圓は、まだ幼く、抵抗する
術もないラットランド殺害の場面がこの台詞
以前にこと細かに描かれ、血で染まったハン
カチを王妃マーガレットに出させることで、
殺害の衝動の野蛮さの印象を蘇らせ、彼女の
残虐さを観客の脳裡に焼き付ける効果がある
と指摘している（福圓、100頁）。このように、
この血で染まったハンカチは、王妃マーガレ
ットの残虐さを目に見える形で表すと共に、ヨ
ークに対して息子を殺した証拠として用いら
れている。そして、『ヘンリー六世 第3部』
に登場するこのラットランドの血の染みがあ
つたハンカチは、これ以降も何度か言及され
るものの、一度も *handkerchief* とは呼ばれ
ず、全て *napkin* という語が用いられている。

次に、もう一作品 *napkin* と血に関係のあ
るシェイクスピア作品を取り上げる。『お気
に召すまま』でも重要な小道具として血まみ
れのハンカチ (*the bloody napkin*) が用
いられている。オーランドーとロザリンドは
会う約束をしていたが、約束の時間を過ぎて
も彼はやってこない。オーランドーの兄であ
るオリヴァーが彼に頼まれロザリンドとシー
リアの元へハンカチを持ってくる場面である。

OLIVER

Orlando doth commend him to you
both,
And to that youth he calls his Rosal-
ind

He sends this bloody *napkin*. Are you he?

ROSALIND

I am. What must we understand by this?

OLIVER

Some of my shame, if you will know of me
What man I am, and how, and why, and where
This *handkerchief* was stain'd.
(4. 3. 91-97)

オリヴァー

オーランドーからお二人によろしくとのこと、
そして彼がロザリンドと呼んでいる若者に、この血まみれのハンカチを渡すようにと。あなたがその？

ロザリンド

そうです。だがこれはどういうことですか？

オリヴァー

いささか恥になることだ、私がなにものであるか、
またどのようにして、どういうわけで、どこで、
このハンカチが血に汚れたかお知りになれば。

オリヴァーはサー・ローランド・ド・ボイスの長男である。その父親はオリヴァーに弟オーランドーをきちんと養育するように命じたが、オーランドー自身の言葉を借りれば「家に置いたまま百姓扱い（*he keeps me rustically at home*）（1. 1. 7）」をされており、

身分に合う生活を送れないばかりか酷い扱いを受け、命まで狙われる羽目になる。しかし、彼はとある事件を契機に悔い改める。この場面の後にオリヴァーが語ることになるが、その事件とは以下のようなものである。

オーランドーがギャニミード（男装したロザリンド）を訪ねようと森の中を歩いていると、緑色の大蛇が仰向けに眠っている男の首に巻きつき、口の中へ滑り込もうとしている場面に出くわす。運よくオーランドーに気がついた蛇は逃げていったが、今度は腹をすかせたライオンと遭遇してしまう。彼に近づいてみたオーランドーは、その男が今まで散々自分を苦しめてきた兄オリヴァーであることに気が付き、そのまま背を向けて立ち去ろうとするものの、復讐心より気高い兄思いの優しさに動かせられ、ライオンに闘いを挑むことになる。オーランドーはライオンを倒すが、腕の肉が食いちぎられてしまう。

OLIVER

His broken promise, and to give this *napkin*,
Dy'd in his blood, unto the shepherd youth
That he in sport doth call his Rosalind.
(4. 3. 153-155)

オリヴァー

約束を破ったお詫びを申し上げ、
この血に染まったハンカチを羊飼いの若者に
渡してくれと言って。その若者を弟は
たわむれにロザリンドと呼んでいました。

以上のように、『お気に召すまま』に登場するハンカチは、オーランドーがオリヴァーを介しロザリンドの手元へ行き、約束を破ってしまった理由を裏付ける品となっている。

また、その傷口はオーランドーがオリヴァーを助けるために負ってしまったものであり、そしてオーランドーが意識を失いそうになる中で、これまで弟を虐待していたオリヴァーが必死に息を吹き返させ、傷口に包帯を巻いて手当てをすることになる。この点で、そのオーランドーの血に染まったハンカチは失われていた血の繋がりである兄弟愛の結実とも見て取れるだろう。血に染まったハンカチは一見グロテスクにも感じられるが、好ましい報せをもたらすものとなっているのである。

前述した『ヘンリー六世 第三部』のハンカチとは、同じ血に染まったものでもまったく正反対の使われ方をしているが、双方とも終止符を打ち、その証拠となるという点で似通っている。ラットランドは命を失い、オリヴァーとオーランドーは互いの憎しみがなくなるという、証拠の品としてハンカチが用いられているのである。

2-2-2 不運を呼び寄せる汗まみれの napkin

ハンカチの大きな役目として挙げられるのは、涙や汗などを拭き取ることだろう。その本来の役目を担っており、napkin という語で用いられている場面は何箇所か存在する。ここでは、シェイクスピアの四大悲劇である『ハムレット』と『マクベス』に登場する napkin を見ていく。

QUEEN

He's fat, and scant of breath.
Here, Hamlet, take my *napkin*, rub thy brows.
The Queen carouses to thy fortune,
Hamlet.

HAMLET

Good Madam. (5. 2. 285-289)

王妃

あの子は汗かきで
もう息を切らせている。ハムレット、このハンカチを、額の汗をおふきなさい。
おまえの幸運を祈って王妃が乾杯を。

ハムレット

ありがとうございます、母上。

作品も終盤に差し掛かり、ハムレットと、彼に父ポローニウスを殺されたレアティーズとの決闘の場面である。ハムレットの叔父であり義父である国王クロードィアスと、その妃であり、ハムレットの実母であるガートルードも彼らの決闘を見物している。実は剣には毒薬が塗りこんであり、杯の酒にも毒薬が仕込まれていた。決闘の最中にクロードィアスがハムレットにその酒を飲まそうとするが、彼は先に決闘を済ましたいからと断り、結局この場面の後にガートルードが毒入りの酒を飲んでしまい、死に至る。この場面は、その前にガートルードが決闘中の息子を気遣ってハンカチを差し出す場面であるが、シェイクスピアの原文を見ると明確に「額の汗」とは書いてはおらず、翻訳した小田島氏による意識と思われる。しかしながら、ハンカチを差し出して額を拭けというのは、決闘の最中ということもあり、汗を拭けということに他ならないだろう。やや間接的ではありながら、ここでの napkin は汗を拭くものとして用いられている。

その他にもう一箇所 napkin と汗が関連付けられている箇所を『マクベス』から取り上げる。

POTER

Here's a farmer, that hang'd himself
on th'expectation of plenty : come in,
thim-pleaser ; have *napkins* enow
about you ; here you'll sweat for't.

(2.3.4-7)

門番

そうか、豊作値下がり見込みで首くくった百姓だな。ようし、入れ、お天気次第の水飲み百姓。ハンカチをたっぷり用意しときな、この地獄じゃたっぷり汗をかかされるからな。

主人公マクベスは荒野で三人の魔女に出会い、「万歳、マクベス、グラームズの領主!」、「万歳、マクベス、コーダーの領主!」、「万歳、マクベス、将来の国王!」と予言される。この時点でマクベスは確かにグラームズの領主であったが、コーダーの領主はまだ生きていた。しかし、コーダーの領主は反逆罪に問われ、マクベスが受け継ぎ、コーダーの領主となることになる。予言が一つ当たったマクベスは、マクベス夫人に促されるがままダンカン王を暗殺する。そしてその翌朝、城門を叩く音とともにこの門番が登場し、聖書劇の門番役を演じている場面である。この百姓というのは、この沢山作物を倉庫に貯えて、翌年凶作だったら値段が上がって大儲けを期待していたところ、豊作続きだったため、絶望して死んだという想定であり、また、王冠を求めて虚無を掴んだマクベスの身の上と似通っていると指摘されている(今西、145頁)。キリスト教では自殺は堅く禁じられており、地獄に落ちるとされていた。この場面では複数の napkin が登場しており、地獄で汗を拭くためのものとして用いられている。

以上、『オセロー』以外の他のシェイクスピア作品に登場する汗と関連する napkin を取り上げた。『ハムレット』では、ハムレットとレアティーズ、そしてクローディアはこの後に剣についた毒がまわり死ぬことになり、作品中ほぼ全ての主要な登場人物が死ぬという暗い結末を迎えることになる。ハンカ

チをハムレットに差し出したガートルードもその直後に息絶える。『マクベス』に登場するハンカチは、門番が演じているものとはいえ、自殺したために地獄に落ちた百姓が汗を拭くために用いるものである。双方の作品では、多少前後関係が異なるものの、napkin が不穏な空気を醸し出し、死という終焉を予感させている点で類似していることが分かる。

この章では、『オセロー』でハンカチを表す際に handkerchief 以外にも napkin が用いられていることに着目し、『オセロー』以外のシェイクスピア作品に登場する napkin がどのように用いられているのかを探ってきた。napkin は共に血や汗が用いられることが多く、また双方共に何らかの終わりを表していることが多いことが判明した。血に染まった napkin は証拠を表し、汗を拭き取る napkin は死と結びついている。前述したよう、ハンカチにはには処女性や清らかさといった意味が込められていると前述したが、その反対の意味もあった。石井によると、ハンカチは身体から出る汗、鼻汁、血液などをぬぐう機能を持っており、女性は男性より「湿っぽく」(watery)、液体(分泌物)を「漏らし」、恥ずべき液体を身体から出し、女性はそれを制御できないために一族の家系や地位、名誉を傷つける危険な存在になりかねないと考えられていたという(石井、18頁)。『オセロー』のハンカチは直接的に汗を拭く場面は描かれていないが、オセローがデズデモナの不貞を信じ込んでしまった点、ハンカチがその証拠となった点、そしてハンカチの苺の刺繍が遠目から見ると血の染みにも見える点を考慮すると、handkerchief ではなく napkin という語が初めて作品に登場する際にのみ用いられ、その後にはまったく登場しないということが今後の悲劇的な展開を予想されるものとなっている。

むすび

以上、『オセロー』に登場する苺模様の刺繍のハンカチに焦点を当て、1枚のハンカチがどのように作品に影響を与えてきているのかを論じてきた。

他のシェイクスピア作品と同様、『オセロー』にも種本となった物語が存在した。ジェラルディ・ツィンツィオ著『百物語』第三篇第七話がこれであり、この作品ではムーア風装飾のハンカチとして登場するが、シェイクスピアはこれを苺模様の刺繍のハンカチへと変えている。したがって、シェイクスピアには何らかの意図があり、苺模様の刺繍は戯曲の主題にも関連するのではないかと考えることが出来る。前稿で論じてきたようにハンカチ自体も現代よりもはるかに高価なものであり、苺もまた現代よりもはるかに高価なものであった。

『サー・トマス・モア』や『二人の貴公子』らを加えたシェイクスピアの戯曲40作品のうち3作品にのみ登場させている苺に着目し、各戯曲でどのように苺が用いられているのかを検証し、苺のシンボリズムを探りながら、何故果実の中でも苺を選んだのかを考察した。苺は果物の中で頻出するシンボルではないが、様々な意味として使われることが多く、相反する意味が多数存在する。具体例としてヒエロニムス・ボスの三連祭壇画『快樂の園』を挙げ、これでは苺が快樂の象徴の果実となっていることが判明したが、一方では三位一体を表すほか、愛の女神や聖母マリアのエンブレムにもなっている。『オセロー』に登場するハンカチの苺模様の刺繍はと言うと、始めは愛の結晶としての苺の模様であったが、デズデモーナの不貞という卑劣な欲望の証となっていると言える。

『オセロー』はシェイクスピアの戯曲の中でも著名な作品であるため、ハンカチに限っ

たものでも数多くの先行研究が存在するが、ハンカチの形や napkin という語が用いられていることが指摘されているものは殆ど存在しない。『オセロー』では handkerchief の他にも napkin がハンカチを表す語として、handkerchief と比較して圧倒的に少なくはあるが、存在している。2種類の言葉が何故用いられているのかを探るために、他のシェイクスピア作品ではどのように napkin が用いられているのかを考察した。napkin には血や汗が共に用いられていることが多いことに着目し、それに絞って分析してみた結果、血に染まった napkin は証拠を表し、汗を拭く napkin は死と結びついていることが明らかになった。『オセロー』のハンカチもまた、また不貞の証拠を示すものであり、デズデモーナ、またオセローらの死と直接的に結びついている。『オセロー』において、napkin は初めてハンカチが登場する際にのみ用いられ、それより後は全て handkerchief が用いられている。このことは、napkin という語が初めて用いられる際に今後の悲劇的な展開と結末とを予言させるものとなっているのである。

このように、『オセロー』に登場する苺模様の刺繍のハンカチが作品に与える影響はとてつもなく大きい。それは単なるハンカチではなく、デズデモーナの貞節そのものであり、それを失うことは貞節をも失うことになるのである。『オセロー』には魔術的で異国的な、予言めいた事柄が多く取り込まれている。その他にも苺の持つ伝統的なシンボリズム、そして植物学的性質を観客や読者に想起させ、napkin という語によって悲劇的な結末を予想させているハンカチとなっているのである。

作品からの引用は特に記載がない限り、

Shakespeare, William *Othello* (The Arden Shakespeare. Third Series) edited by E. A. J. Honigmann, London: Thomas Nelson and Sons Ltd, 1997.

翻訳は『オセロー』小田島雄志訳、白水社、1983年のものに拠る。

参考文献

Berger, Jr. H. "Impertinent trifling: Desdemona's handkerchief," in *Shakespeare Quarterly*, Folger Shakespeare Library New York : Shakespeare Association of America, Vol. 47 Issue 3, 1996, 235-250.

Bloom, Harold. *William Shakespeare's "Othello"* (Bloom's Notes) edited and with an introduction by Harold Bloom, Broomall: Chelsea House, 1996.

Boose, Linda. "Othello's Handkerchief: The Recognizance and Pledge of Love" in *Critical Essays on Shakespeare's Othello*, edited by Anthony Gerard Barthelemy, New York: Maxwell Macmillan International, 1994, 55-67.

Crystal David, Ben Crystal, *Shakespeare's Words: A Glossary & Languages Companion* Foreword by Wells, Stanley, London: Penguin Books Ltd, 2002.

Kremenik, Michael J. 'How woman Destroy Iago in Shakespeare's *Othello*' 川崎医療福祉大学編 *Kawasaki journal of medical welfare*, 3号、1巻、1997年、23-30頁

Shakespeare, William. *Hamlet* (The Arden Shakespeare the arden edition of the works of William Shakespeare), edited by Harold Jenkins, London : Methuen, 1982.

———, ———. *Othello* (Penguin Shakespeare) edited by T. J. B. Spencer, London: Penguin Books, 2005.

———, ———. *Othello, the Moor of Venice* (The Oxford Shakespeare) edited by Michel Neill, Oxford University Press, 2006.

———, ———. *King Richard III* (The Arden Shakespeare), edited by James R.

Siemon, London: Thomas Nelson and Sons Ltd, 2009.

———, ———. *The first part of King Henry IV* (The Arden Shakespeare) edited by A.R. Humphreys, London : Methuen, 1966.

———, ———. *Macbeth* (The Arden Shakespeare the arden edition of the works of William Shakespeare) edited by Kenneth Muir 9th ed, London : Methuen, 1962.

———, ———. *As You Like it* (The Arden Shakespeare the arden edition of the works of William Shakespeare) edited by Agnes Latham, London : Methuen, 1975.

———, ———. *The merry wives of Windsor* (The Arden Shakespeare the arden edition of the works of William Shakespeare) edited by H.J. Oliver, London : Methuen, 1971.

Simpson, J.A. and E.S.C. Weiner, *The Oxford English dictionary* 2nd ed. V.10. New York : Oxford University Press, 1989.

Romero, Joseph Z. "Emilia's Intentions and the Handkerchief in *Othello*" 長崎ウエスレヤン大学編『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要』2巻、1号、2004年、63-69頁

Wilson, Rob. "Othello: Jealousy as mimetic contagion." in *The American imago : a psychoanalytic journal for the arts and sciences*, Vol. 44, Baltimore : John Hopkins University Press, 1987. 213-233.

新井基祐『シェイクスピア四大悲劇—虚と実—』大阪教育図書、2005年

石井美樹子『『オセロー』—デズデモナーの白いハンカチエリザベス女王の廷臣が手にする白いハンカチ』神奈川大学人文学会編、『人文研究』162巻、2007年、5-59頁

今川香代子『シェイクスピア食べものがたり』近代文芸社、1999年

今西雅章編『大修館シェイクスピア双書 マクベス』大修館書店、1987年

オウイディウス『変身物語』中村善也訳、岩波文庫、2009年

大場建治『対訳・注解 研究社シェイクスピア

- 選集10 オセロー』研究社、2008年
- 『シェイクスピアの翻訳』研究社、2009年
- 加藤憲一『英米文学植物民俗誌』富山房、1976年
- 河合祥一郎『シェイクスピアの男と女』中公叢書、2006年
- 河島英昭編『澁澤龍彦文学館 1 ルネサンスの箱』筑摩書房、1993年
- 神原正明『ヒエロニムス・ボスの『快樂の園』を読む』河出書房新社、2000年
- 楠明子『英国ルネサンスの女たち シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』みすず書房、1999年
- シェイクスピア『シェイクスピア全集13 オセロー』松岡和子訳、筑摩書房、2006年
- 『オセロー』福田恆存、新潮社、1973年
- 『シェイクスピアVI オセロー十二夜』木下順次訳、懇談社、1988年
- 『新訳 リチャード三世』河合祥一郎訳、角川書店、2007年
- 『シェイクスピア全集7 リチャード三世』松岡和子訳、筑摩書房、1999年
- 『対訳・注解 研究社シェイクスピア選集7 マクベス』大場建治編注訳、研究社、2004年
- シェイクスピア、ウィリアム『オセロー』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『ウィンザーの陽気な女房たち』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『ハムレット』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『冬物語』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『マクベス』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『ヘンリー四世第一部』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『リチャード三世』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『ヘンリー五世』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『ヘンリー六世第一部』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 『ロミオとジュリエット』小田島雄志訳、白水社、1983年
- 柴田稔彦編『大修館シェイクスピア双書 お気に召すまま』大修館書店、1989年
- 高杉玲子「オセローのハンカチ：『オセロー』における文化交換の倫理」、大東文化大学英语学会編『大東文化大学英语論叢』37巻、2006年、11-25頁
- 高橋康也等編『研究社シェイクスピア辞典』研究社出版、2000年
- 竹林滋編者代表『研究社新英和大辞典 第6版』研究社、2002年
- 徳見道夫「『ヘンリー六世』三部作における女性の登場人物について：家父長制への揺さぶりと再建」九州大学編『英語英文学論叢』61巻、2011年2月、1-15頁
- 服部厚子「『オセロー』における主体と空間形象」鈴鹿医療科学大学編『鈴鹿医療科学大学紀要』14巻、2007年、23-30頁
- フリース、アト・ド『イメージ・シンボル事典』山下圭一郎他訳、大修館書店、1984年
- 水之江有一『シンボル事典』北星堂書店、1985年
- 三益隆一「『オセロー』における逸脱と侵犯：「語り」と「物語」の視点から」金沢大学編『言語文化論叢』6巻、2002-03年、27-50頁
- モア、トマス『リチャード三世伝』藤原博訳、千城、1986年
- 本橋哲也『侵犯するシェイクスピア 境界の身体』青弓社、2009年
- 『本当はこわいシェイクスピア<性>と<植民地>への渦中へ』講談社2004年
- 森本美樹『シェイクスピアの悲劇 オセロー—愛の旋律と不協和音—』文芸社、2003年
- 山崎稔恵「『オセロー』の、あの母模様のハンカチーフ」関東学院大学人間環境学部教養学会編、『関東学院大学人間環境学部教養学会紀要』創刊号、2003年、13-25頁
- 吉中孝志「解釈への不安—『オセロー』のハンカチについての図像学的注釈—」日本英文學會編『英文學研究』75巻、研究社、1998年、205-218頁
- 「北方ルネサンス～ヒエロニムス・ボス」
<http://www.emimatsui.com/arthistory/north/bosch.html> (2012/7/31アクセス)

¹ この場面は、小田島訳ではリチャードではなくグロスターとなっているが、参照したアーデン版 *King Richard III* では Richard という記載になっているため統一した。

² しかしながら、逆説的にむしろ性欲を認めず、快楽に耽らないことのほうが「罪」であるのだと見なす説もある。

³ 図1, 3は神原正明『ヒエロニムス・ボスの『快楽の園』を読む』河出書房新社、2000年の写真を借用し、図2は「北方ルネサンス～ヒエロニムス・ボス」<http://www.emimatsui.com/arthistory/north/bosch.html>（2012/8/18アクセス）から画像を借用した。

